

酷寒のアンナプルナ・Ⅱ南西壁

山本 一夫

私の古き岳友、岡山在住の近藤国彦氏との10年来の約束であった二人だけで8000m峰を、それも40歳までにやってみようじゃないかという一つの課題が、ひょんなことから実現することになった。当初、狙っていたマカルーの許可がなかなか下りず、アンナプルナ・Ⅱなら空いているし、我々の希望と妥協できるのではないかということで、リック・リッジウェイの「ちょっとエベレストまで」と気取るわけじゃないが、近くの山に気軽に出かけるように、二人で8000m峰の岩壁登攀となったのである。

1987年9月2日、いよいよ日本を出発する。ポカラより総数20名のミニ・キャラバン隊は、1週間後には、標高2500mのベースキャンプに到着する。ヒマラヤのベースキャンプとしては極端に高度が低く、頂上までの高度差が5500mもあるので、このルートの困難さを改めて覚悟する。

9月18日、ポーター5名とA.B.C.に向けて出発する。途中、120mの岩壁と氷河を越えて9月20日に標高4500mのA.B.C.に到着する。ポーター達が下山すると、いよいよ二人きりの世界である。

アンナプル・Ⅱとラムジェン・ヒマールに押し出されて流れる氷河を越えて、更に300mの岩壁を突破すると、10月2日、標高6800mの南西壁の基部に達した。来る日も来る日も快晴が続くが、気温が異常に低く、寒暖計は、日中でマイナス25度～30度を常に指している。突風が吹き荒れ、我々の行き先を阻む。二人の両手両足の指先はすでに感覚がなくなってきている。凍傷が進行しているようだ。頂上まであと400mであるが、1日かけても100mしかロープを伸ばせない。このまま進めば必ず凍傷で手足の一部を失うことになる。親からもらったこの身体の一部を失うようなことになれば、二人の山への取り組み方の姿勢に反する。

10月13日、天候快晴。13時30分頃の二人の会話。

「これ以上は、命あつての物種やでユ…」

「おれもそう思う」

「下りようか…」

「下りよう、下りよう」

下山中標高4700mの氷河の中でアクシデントが発生する。私が、10mほどクレバスに墜落して右足首と左膝を捻挫してしまったため、後1日でベースキャンプという所から4日間も掛けて下山するはめとなってしまったのである。また、10月19日には、ヒマラヤ全山を襲う悪天候と異常な大雪に追い討ちをかけられ、散々な目に会いながら我々の山行は、終わることとなった。

だが、快晴の天候の中、大寒波に7530mより追い返された悔しさはなく、むしろ、本当に大きな山行を成し遂げた充実感に酔いしれているのである。